

「正直な言葉で伝える」
二年、農家が使っていない圃場を借り、栽培試験の調査区を設けた。そこでセンターの職員が協力して大豆を栽培し、土壌や収量に関するデータをとる。結果を踏まえて農家を訪ね、圃場ごとの施肥計画を練った。

「給食で大豆を食べている子どもたちが、畑の見学に来てくれたことがあります。大豆が実っている様子を初めて見て、はしゃぐ様子が今でも目に浮かびます。そんな光景を守り続けたい」と若菜さん。TACと手を携え、産地としてのさらなる飛躍をめざす。



JAみずから試験し、 農家のモチベーションがアップ!

JAが栽培試験圃場を設置し、確かなデータに基づいた提案で、農家の信頼を得た。土壌診断や講習会の開催で適切な施肥の方法を伝えたことで、より効果的な施肥計画につながった。座間営農経済センターが年4回発行する「座間センター通信」などを活用し、試験結果を大豆生産組合だけでなく、座間地区内の農家にも周知。地力にたいする関心が高まり、センターの堆肥の取扱量が増え、問い合わせ件数も増加した。

TACの提案が背中を押す

イラストはJA全農TAC・営農支援課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」
TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで
(<https://www.zennoh.or.jp/tac/>)



「家畜ふん堆肥を導入すれば、圃場のリン酸不足や土壌有機物減少をカバーできると考えました。同時に、家畜のふん尿処理の課題解決にもつながると」
しかし、堆肥の散布は、化成肥料よりも労力がかかる。同組合の農家はみな、米麦や花卉施設野菜などの複合経営であり、高齢の農家も多い。圃場や農家の状況に応じて、堆肥と化成肥料とを組み合わせた施肥設計を提案するため、森さんたちの挑戦が始まった。

正直な言葉で伝える

「施肥計画を変えるのは、経営上、大きな賭けです。でも、提案を信じようと思いました。うちのTACは提案して終わりではなく、何度も畑に足を運んで、自分のことのように真剣に取り組んでくれますからね」
そして迎えた収穫の秋、組合員から、「品質が向上し、収量が増えた」とのうれしい声が続々と届いた。調製を終え、袋詰めされた大豆を前に、笑顔の若菜さんと森さん。土壌や収量調査の結果をまとめたファイルのぞき込み、早くも来年の作付けについての相談が始まった。

JAさがみ

神奈川県のはば中央に位置し、藤沢市・茅ヶ崎市・寒川町・綾瀬市・大和市・鎌倉市・座間市・海老名市が管内。「茅ヶ崎のトルコナス」「さがみのトマト」「菜速あやせコーン」「湘南梨」などが、地域の特色を生かして生産されている。管内北部に位置する座間市では、野菜や水稲の作付けが盛んだ。



JAさがみの ウェブサイト



甘みが強くコクがある「津久井在来」のきな粉をたっぷり使った「きなこ玉」と100gの使い切りサイズで便利な「きなこ」。座間市の特産品に認定され、お土産としての需要も期待される

持てるすべての力を注ぎ、 行動するから信頼される

——神奈川県 JAさがみ

土壌の状態が農作物の品質や収量に及ぼす影響は大きい。しかし、施肥計画の変更に踏みきることは、農家経営を左右する大きな決断だ。農家の不安を払拭し、選択肢を増やすために、みずから試験して最適な提案と伴走のあり方を模索するTAC (地域農業の担い手に向くJA担当者) の取り組みを追いかけた。

西島佳祐＝写真 photo by Keisuke Nishijima JA全農TAC・営農支援課＝企画協力



写真右から、若菜さん、森さん、JAさがみ組織経済部指導販売課の阿部励課長、同JA座間営農経済センターの和田聡センター長。同JAの営農部門では、「全員がTACという構えで、得意分野や経験を生かして組合員と向き合う」と阿部課長。和田センター長も、「職員の課題意識を尊重し、センター全員でサポートしていく体制だ」と続けた

JAさがみの直売所「米ディハウスざま」で、幼い子が母親に「また食べたい」とねだるのは、座間市産の大豆「津久井在来」を使った和菓子「きなこ玉」だ。二〇二二年二月の発売以来、地域住民の人気を集め、販売数を伸ばしている。
「使いにくいとの声があった小粒の大豆はきな粉に加工しました。生産した大豆が余さず使われ、多くの人に喜んでもらえると思うと励みになりますね」
そう話すのは、座間市大豆生産組合組合長の若菜成之さん。一三年設立の同組合では、八人の農家が約二・五haで年四tを超える収量を上げ、市内の豆腐店や、一校の小学校給食に大豆を提供している。豆腐店と連携し、豆腐や納豆に加工・販売する地産地消の取り組み、児童や栄養士を圃場に招いた食農教育が大豆の価値を高め、出荷量は増加傾向にある。一方で、同組合の一〇a当たりの平均収量は年々減少し、安定した収量の確保が課題となっていた。
原因として考えられるのは、圃場の地力低下だ。JAさが



担い手とTAC
このコーナーでは、地域の担い手とTACが“未来の農業”のために取り組む活動を、全国のみなさんに届けます